



Title	「満州」における朝鮮人「安全農村」に関する一考察：朝鮮人移民一世への聞き取り調査を通して
Author(s)	朴, 仁哲
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 106, 103-117
Issue Date	2008-12-18
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.106.103
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35077
Type	departmental bulletin paper
File Information	106_p103-117.pdf



「満州」における 朝鮮人「安全農村」に関する一考察

— 朝鮮人移民一世への聞き取り調査を通して —

朴 仁 哲*

A Study of the Korean “Anzen Noson” (secure villages) in Manchuria

: Based on the interviews with first generation Korean Immigrants

Renzhe PIAO

【要旨】朝鮮総督府は、1931年の「満州事変」以降、東亜勧業株式会社（以下東亜勧業）を通して、1932年から1935年にかけて、「満州¹」に五ヶ所の「安全農村」を建設した。1945年に「安全農村」は日本の敗戦により「満州国」とともに崩壊した。その歴史は今からそれほど遠くない70年前のことであるが、実際に五ヶ所の「安全農村」でのフィールドワークを通して、「安全農村」に関する記憶が継承されず風化していることを痛感した。「安全農村」を検討対象にした研究は、さほど多くはない。「安全農村」は、これまでの先行研究においては、文献資料によるマクロの視点で考察されてきている。筆者は先行研究での論考を踏まえたうえで、本稿で朝鮮人移民一世（以下移民一世）のライフ・ヒストリーによるミクロの視点で「安全農村」について考察したい。「安全農村」で暮らし、体験したライフ・ヒストリーは、移民一世の個人史でありながら、彼らを取り巻くその時代の社会史でもあると考える。本稿の目的は、「安全農村」で暮らした移民一世の証言に基づき、「安全農村」の建設から瓦解に至るまでの事態の細部を明らかにし、「満州国」の社会史の一断面を照らし出すことである。

【キーワード】「安全農村」，「満州国」，移民一世，ライフ・ヒストリー，ミクロの視点

1. はじめに

朝鮮総督府は、1931年9月18日以降の日本軍の軍事行動によってそれまで生活していた村を離れざるをえなくなった朝鮮人農民を管理しようとして、東亜勧業に補助金を与え、1932年から1935年までに中国東北部の五ヶ所に「安全農村」を建設させた²。「安全農村」には、1932年に建設された「鉄嶺安全農村」をはじめ、「河東安全農村」，「営口安全農村」，「綏化安全農村」，「三源浦安全農村」がある。

* 北海道大学大学院教育学研究院国際多元文化教育論講座博士後期課程

1. 1 先行研究の位置づけ

「安全農村」に関する研究としては、金（1992年）の研究を嚆矢とし、梶村（1993年）、洪（1997年）、孫（2003年）、玄（2003年）、金（2004年）、金（2007年）などがある。金（1992年）と梶村（1993年）は、「満州」の抗日民衆史の一部として「安全農村」をとらえた。孫（2003年）は、「安全農村」の設立を日本の「満州国」への朝鮮人移民政策の一環としてとらえた。また、洪（1997年）は、「鉄嶺安全農村」を中心として、「安全農村」の農地問題、金融状況、教育条件などについて考察した。金（2004年）は、「営口安全農村」と「三源浦安全農村」を中心として、「安全農村」の設置および運営などについて論じた。玄（2003年）は、農業生産を通して「安全農村」住民の経済状況について論考している。金（2007年）は、「集団部落」との違いの観点から、「安全農村」を「集団部落」と比較対照しながら、「安全農村」の社会的および経済的実態を追究した。

「安全農村」に関する研究があまり進んでいないなか、以上の先行研究の成果は大変貴重である。しかし、これまでの研究は、文献資料に基づいてマクロの視点で「安全農村」の社会的および経済的状況について分析・考察したものが多く、移民一世のライフ・ヒストリーによるミクロの視点で「安全農村」について分析・考察した研究はまだ見られない。本稿では、筆者が実際に五ヶ所の「安全農村」でフィールドワークを行い、「安全農村」で暮らした移民一世への聞き取り調査を通して、「安全農村」について考察する。

1. 2 研究の意義

「安全農村」を研究する意義は三つあると考える。

第一に、「安全農村」の実態を把握することは、どちらかといえばマイナーな事柄かもしれないが、その検討を通じて、「日本帝国主義」の朝鮮および「満州」支配に対する認識を深めることに寄与できると考える。

第二に、「安全農村」は、1932年の「鉄嶺安全農村」の建設に始まり、1945年の日本の敗戦により「満州国」とともに崩壊した。「安全農村」は「満州国」の存続と同じ年月を経ていることから、「安全農村」の研究を切り口として、「満州国」の研究の深化にも寄与できると考える。

第三に、「安全農村」は、現在ほとんどが朝鮮族郷（鎮）となり、そこで多くの朝鮮族が暮らしている。「安全農村」の研究は、今後の中国朝鮮族の研究にも寄与できると考える。

2. 「安全農村」が建設された背景

「安全農村」が建設された背景には、二つの大きな要素があったと考えられる。第一は、「満州事変」後、在満朝鮮人社会を取り巻く環境が激変したのがきっかけである。第二は、「日本帝国」が安定的な食糧確保³を求め、併せて朝鮮半島の過剰人口を「満州」に移住させ、朝鮮国内の人口圧力を解消しようとしたと考えられる。

まず、第一の背景を見てみよう。1931年9月18日、関東軍は現在の遼寧省瀋陽市郊外の柳条溝附近の鉄道の一部を自ら爆破し、これを口実に軍事行動を開始した。この軍事行動が「満州事変」となり、翌1932年3月1日に「満州国」が成立した。

「満州事変」後、日本軍の侵略範囲が広がれば広がるほど、奥地に入った朝鮮人たちは避

難しなくてはならなくなり、居住地への帰還計画が失敗に終わった。そこで、朝鮮総督府は満鉄と協議したうえ、南満と北満の鉄路沿線に集まっていた多くの朝鮮人難民を統制するために、適当な地域に「自作農創定」という美名の下に集団部落を建設し、逐次「模範農村」を建設しようとした⁴。こうして「満州事変」後、「満州」の各地域に五ヵ所の「安全農村」が建設された。

村 名	設立年代	所 在 地	1935年9月		1940年12月	
			戸数	人口	戸数	人口
鉄 嶺 農 村	1932年	奉天省鉄嶺県鉄嶺附近	戸	人	戸	人
営 口 農 村	1933年	奉天省営口県営口附近	269	1,235	383	925
河 東 農 村	1933年	浜江省珠河县烏吉密河站附近	1,035	5,461	1,870	4,176
綏 化 農 村	1934年	浜江省綏化県綏化附近	789	3,372	728	1,825
三源浦農村	1935年	奉天省柳河县三源浦附近	337	1,314	446	1,142
合 計			—	—	172	355
			2,430	11,382	3,639	8,423

表1 「安全農村」一覧表

出所 満鉄調査部（1938）『満洲農業移民概説』，pp.77-78. 梶村秀樹（1993）
「1930年代満洲における抗日闘争に対する日本帝国主義の諸策動—『在満朝鮮人問題』
と関連して」『梶村秀樹著作集』第4巻，明石書店，p.187.

次に「安全農村」が建設された第二の背景を見てみよう。

1938年の「満洲開拓民選出ニ関スル件⁵」において、「満洲建国ノ理想顕現ニ協力セシメツアルガ一面耕地狭少ノ為多数零細農ヲ包擁スル本道（慶尚北道—筆者注）トシ開拓民事業ハ土地政策上極メテ重要ナル（中略）過剰戸数ヲ転出セシムルヨウ積極的ニ措置スル」と書かれている。この文書を読めば、当時の朝鮮半島は、特に慶尚道をはじめとする南部地域は人口が多くて耕地が少ないので、過剰戸数を「満州」に転出させようとする意図が読み取れる。当時、朝鮮半島から「満州」に開拓移民を積極的に送り込んだ歴史的事実をもう少し裏付けるため、もう一つ当時の資料を見てみよう。

資料は、『京城日報』が1935年7月2日から30日にわたり、「南満の同胞安全農村を訪ねて」と題して連載した記事の1935年7月30日の分である。記事のタイトルは「王道楽土を謳歌す 移民大行進 満洲移民史上に一大画期」となっており、中の記事には「昨年に比し本年は営口と一般農村を加へ八百二十八戸四千百二十名の増加を示し、年々増加の趨勢を辿っている（中略）東亜勸業会社重役の談によると鮮農移民としては未だその実を挙げ得ているとはいえないが試験的にこの安全農村の完成を一つの契機として将来多数の内鮮人の満洲移民が実現せらるることともなればこの事業の創設こそは満洲移民史上に一つの大きなエポックを画したものと云わねばならない」と書いてある。

この二つの資料をつき合わせてみていえるのは、「安全農村」は朝鮮半島から過剰人口の送り出しの受け皿になったうえ、長期的には移民を受け入れて、食糧を確保する「試験場⁶」であったということであろう。

3. 研究方法

本研究は、ライフ・ヒストリー法⁷を用い、移民一世へのインタビュー調査を中心とし、それに文献資料を加え、それらの資料に筆者の解釈を加えるという方法をとった。

3. 1 調査時期

2006年8月から2008年9月にかけて、中国で計5回フィールドワークを行い、「満州」に移住した移民一世82人にインタビューすることができた。そのうち「安全農村」についての調査は計3回行い、「安全農村」で暮らした移民一世16人にインタビューすることができた。具体的なスケジュールと場所は以下のとおりである。

- ① 1回目：2006年9月7日～9月8日 「河東安全農村」（現河東朝鮮族郷）
- ② 2回目：2007年9月14日～9月16日 「綏化安全農村」（現興和朝鮮族郷）
- ③ 3回目：2008年8月12日～8月14日 「綏化安全農村」
- 2008年8月19日～8月20日 「鉄嶺安全農村」（現鉄嶺県腰堡鎮⁸）
- 2008年8月21日～8月22日 「営口安全農村」（現大洼県栄興朝鮮族郷）
- 2008年8月24日 「三源浦安全農村」（現三源浦朝鮮族鎮）
- 2008年8月27日～8月28日 「河東安全農村」

3. 2 調査方法

調査対象者は、基本的に朝鮮半島で生まれ、戦前「安全農村」に移住した移民一世である。聞き取り調査⁹をする前に、調査対象者の選定にあたり、時代背景を客観的に反映させるため、調査対象者の朝鮮半島での出身地域および中国社会での階層、職業、学歴などのバランスにできるだけ配慮した。インタビューの使用言語は朝鮮語である。

4. 調査結果および考察

4. 1 調査結果

前述したように、これまでのフィールドワークで「安全農村」に移住した移民一世16人にインタビューすることができた。本稿では、そのうちの二つの事例を紹介したい。事例1のX K氏は「分散移民¹⁰」として「綏化安全農村」に入村した事例である。事例2のLD氏は「集団移民」として「営口安全農村」に入村した事例である。以下は二つの事例の紹介である。

事例1

X K氏は1928年に朝鮮半島の慶尚道に生まれた男性である。

X K氏は現在、綏化市内に在住している。X K氏には、2回インタビューを行った。1回目は、2007年9月16日に綏化市朝鮮族老人協会で行い、2回目は2008年8月14日にX K

氏の自宅で行った。今回X K氏にインタビューする前の2008年8月12日～13日に、「綏化安全農村」（現中国綏化市興和朝鮮族郷）でフィールドワークを行った。

「綏化安全農村」に移住して

X K氏によれば、1939年頃に「分散移民」で「綏化安全農村」に入った。1933年頃に父親が日本へ出稼ぎに行ったが、1936年に母親が死んだので、父親が朝鮮に戻ってきた。当時、朝鮮は日本の植民地支配下で、生活が貧しかった。その頃、朝鮮では、「満州」に行けば犬でも白米を食べられるという噂が広まっていた。それで、先に1936年に「集団移民」で「綏化安全農村」に渡った叔母の家族を頼って「満州」に入ったという。

「綏化安全農村」には綏化第一農村と綏化第二農村があった。自分の家族が入ったのは、綏化第二農村（現在の勤労村）だった。綏化第一農村は朝鮮半島の各道から移民がきていたが、綏化第二農村の人たちはほとんどが慶尚道からきていたという。

「綏化安全農村」に入村した人には、一戸に2.4町歩の土地が与えられた。「綏化安全農村」を開拓した時、もともと村に住んでいた漢族の農民を追い出して朝鮮人移民を入れたので、漢族の農民の抵抗があったと叔母に聞いたことがあるという¹¹。

「綏化安全農村」には、1937年にスターリンに追放されて¹²、「満州」に逃げてきた朝鮮人もいた。村にはそのようにしてソ連から逃れてきた6家族が住んでいたと憶えている¹³。「綏化安全農村」に入るためには、入村誓約書が必要だったという。

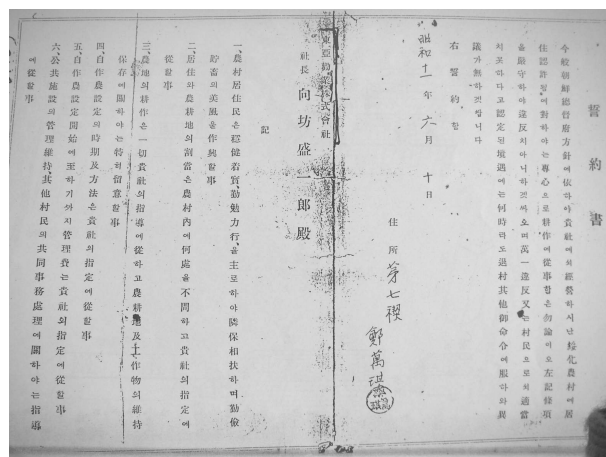


図1 入村誓約書

出所 鄭吉泳¹⁴（1997）『興和五十年 1934～1984』（私家版）

学校生活

1939年に「綏化安全農村」に入ったその年から綏化第二農村の古城分校に入り、1943年には綏化第一農村の古城本校に入った。先生は釜山の東萊師範学校を卒業した人が多かった。同級生の中には、ウラジオストクから逃れてきた許丙男と許乙男兄弟がいたという。



写真1 綏化古城国民優級学校卒業時の写真。

X K氏提供。上の左から5人目がX K氏，3人目が許丙男氏。

学校では，1年生の時に朝鮮語の授業があったが，2年生の時から朝鮮語の使用が禁止され，すべて日本語による授業だった。家でも朝鮮語で話すことが禁じられたが，家では監視する人がいないので，朝鮮語で話した。しかし，学校に行って不注意に朝鮮語を使ったら，処罰を受けたという。

学校では月曜日から土曜日まで，全校生徒が毎日1時間ずつ軍事訓練を受けた。軍事訓練は軍隊式の本格的なものだった。ラッパを吹き，太鼓を叩き，歩くのも分列行進で歩調を合わせなければならなかった。生徒たちの中では，「起きろよ，起きろよ，起きないと大隊長に叱られる…」という自作の歌まで流行っていたという。軍事訓練では，本物の銃と刀を真似た木で作った銃と刀を使っていた。男子も女子も軍事訓練を受けた。また，学校では学業以外に，農事訓練も頻繁に行われた。そして，毎朝全校の生徒を集めて，東京の方向に向かって天皇に対して遥拝を強要されたという。



写真2 農作業に従事する場面。

玄徳熙氏提供。



写真3 軍事訓練の場面。

鉄嶺県友誼朝鮮族中心小学校提供。

「安全農村」の外の状況

戦前、綏化市に軍飛行場があった。飛行機が「綏化安全農村」の空を飛ぶのをよく見かけた。ある日、飛行機が「綏化安全農村」の水田に墜落したのを、放課後同級生たちと一緒に見に行ったことがあるという。「綏化安全農村」近くの綏棱というところに日本人の移民団が入っていた¹⁵。敗戦直後の混乱のなか、たくさんの日本人開拓団員が「綏化安全農村」附近の秦家というところで自殺したという。

初めて「安全農村」を出た

1944年に古城本校を卒業した。家が貧しかったので、進学はできなかった。古城本校5年生の担任だった申允哲先生は面倒見がよかった。1945年1月に申允哲先生と一緒に北安と齊々哈爾方面に仕事探しに出かけた。いろいろな地域を回って、最後は齊々哈爾の関東軍所轄の商店に店員として採用された。正式に採用されるためには、「綏化安全農村」から発行された紹介状のような書類の提出が必要だったため、一旦「綏化安全農村」に戻らなければならなかった。しかし、当時もう戦況が深刻で、至るところに関東軍が群がっていて、大変な状況になったと思った。それで、「綏化安全農村」に戻ったあと、齊々哈爾には行かないで、「綏化安全農村」で敗戦を迎えたという。

事例2

LD氏は1927年に朝鮮半島の慶尚道に生まれた男性である。

LD氏は現在、梅河口市に在住している。インタビューを行う前日の2008年8月22日、LD氏が朝鮮半島から移住させられた「営口安全農村」（現中国営口市大洼県榮興朝鮮族郷）でフィールドワークを行った。

2008年8月23日、午前と午後合わせて5時間に及ぶ長時間のインタビュー調査を、LD氏の自宅で行った。インタビューをスムーズに行うために、開始する前に、調査の趣旨を説明し、「安全農村」に関する資料および写真を見せた。LD氏は筆者に、「『安全農村』の歴史を知ることは、中国と日本だけでなく、世界平和にもつながると思うので、私が知っていることを君にすべて話すね」といったあと、「満州」に移住して以来70年間の歴史を一気に語ってくれた。

「集団移民」で「営口安全農村」に渡った

LD氏によれば、自分の家族は1937年3月に「集団移民」で「営口安全農村」に渡った。「営口安全農村」に渡ったその年の7月に日中戦争が勃発したのを、今でもはっきり憶えているという。

移民団に参加したのは、両親と一番上の兄夫妻と甥¹⁶と姪、そして二番目の兄と自分の8人家族だった。移民団に参加したのは、父親が1931年頃、朝鮮にある金融組合に400円を借りて、朝鮮人参の栽培をしたのが発端だったという。朝鮮人参は栽培期間が長いので、1936年頃にやっと収穫ができるようになった。しかし、収穫した頃、朝鮮人参の値段が暴落してしまった。金融組合に借りたお金は、年間の利息だけでも120円にもなり、自分の家はその借金の返済ができなかった。ちょうどその頃、朝鮮総督府が朝鮮各地で「満州」移民団を募集していた。移民を募集する人に、「満州」に移住すれば今までの借金を返済しなくてもいい

いといわれた。朝鮮総督府が金融組合に借金返済しないで済むようにしてくれたので、父親の決断で移民団に参加したという。

自分たちが参加した移民団は、慶尚北道から100戸、慶尚南道から100戸だった。移民団に参加した総人数は約1,100人だったという。朝鮮の慶尚道から汽車に乗り、「満州」の営口駅で降りた。故郷の慶尚道の3月はだいぶ暖かったが、「満州」ではまだかなり寒かった。遼河がまだ凍っていたため、橇に乗って遼河を渡ったという。

臼を隠して

朝鮮が日本の植民地になる前は、生活は貧しかったが、朝鮮人は平穏な生活を送っていた。しかし、日本人が朝鮮に入った後、その平穏な生活が破られたという。「満州」に移住する前は、借金の返済をしなくて済むようになったので、家族のみんなは有難く思っていた。しかし、「営口安全農村」に渡ってから、朝鮮総督府が朝鮮人移民団を募集したのは関東軍に食料を提供するためではないかと思うようになったという¹⁷。

1937年、「営口安全農村」に入った年から農作業を始めた。稲を収穫して脱穀したら、屯長が人を連れてきて、各戸を回って穀物を回収した。脱穀は足踏み式だった。藁に稲を残さずきれいに脱穀するように命じられた。臼で稲を搗いて食べるのを防ぐために、臼が見つかったらすべて没収された。自分の家は小さい臼を持っていたが、没収されないように、庭に穴を掘って臼を隠し、深夜か未明の時間に臼で稲を搗いて密かに食べたこともあった¹⁸。母親の手伝いをして、臼で稲を搗いたこともあった。農閑期に^{カマス} 吠を作ることにもさせられたという¹⁹。

学校生活

「営口安全農村」に渡って、その年に営口農村学校に入学した。学校には26学級があり、生徒が1200名ぐらいいた。当時、営口農村学校は「満州」地域でも大きな学校だった。履修科目の中に、国語（日本語）、朝鮮語、修身、数学、満語（中国語）などがあったという。



写真4 1942年頃の河東農村国民優級学校の授業風景。

玄徳熙氏提供。

自分が学校に通った頃、5年生までは朝鮮語の授業があったが、6年生の時からは朝鮮語の授業がなくなった。家に帰っても朝鮮語を使用しないように命じられたが、家では朝鮮語を話した。学校は生徒の全員に札を10枚ずつ配り、生徒同士お互いに監視するようにした。誰かが朝鮮語を使ったら札を1枚没収される制度で、10枚全部没収されたら、学校から除籍されるなど厳しく処罰された。そして、学校では学業以外に、農事訓練や軍事訓練も頻繁に行われたという。

1942年12月に営口農村学校を卒業し、学校の推薦を受けて海城師道学校に進学した。学業の成績がよかったので、どの学校でも進むことができたが、家が貧しかったため、学費を払わなくてもよい師道学校を選んだという。当時、卒業したのは4学級で、自分が全校卒業生の代表として卒業証書をもらったので、卒業人数が185名だったのを憶えている。海城師道学校に進学したのは全校で3人しかいなかった。残りの卒業生は「営口安全農村」で農作業をする道しかなかった。「営口安全農村」には、神社と病院と警察署もあった。神社には何度も行かされた。神社参拝には抵抗感があったが、仕方なく行ったという。

一番印象深かったこと

営口農村学校に通っていた時、李再順という京城師範学校を卒業した大変学識のある先生がいた。李再順先生は民族心が強くて、生徒たちの面倒見もよかった。それで、李再順先生は生徒たちに大変人気があったという。

当時、「営口安全農村」には、「満州国」や朝鮮総督府の高官がよく視察にきた²⁰。そのような場合は、全校の先生と生徒が遠い駅まで出迎えにゆかなければならなかった。4年生の頃のある出来事だが、「満州国」の高官于〇〇（下の名前をはっきり憶えていないという）が「営口安全農村」視察に来た。于〇〇は漢族で、中国語で訓示した。生徒たちは初めて中国語を聞いたので、不思議に思って笑ってしまった。その時、李再順先生は全校の生徒を叱って、「朝鮮人の魂はこれしかないか²¹」と叫んだ。その言葉を今でもはっきり憶えているという。

李再順先生は生徒たちに朝鮮人の民族意識を喚起しようとしたのではないかという。「朝鮮人の魂」は「大和魂」に対抗する言葉だった。その時、「大和魂」という言葉は使っても、「朝鮮人の魂」という言葉は使ってはいけなかった。その出来事で、李再順先生は大和田重光という日本人の校長先生に怒られ、学校を辞めさせられた。今でも李再順先生を恨んでいるという。

日本式の名前に変えられた

1941年頃、日本式の名前に変えるように命じられた。先祖代々から伝わった名前を変えることには、かなり抵抗感を覚えたが、仕方がなかったという。名前を変えることは、「創氏改名²²」だといわれ、ルールもあったが、自分の家族はそのルールには従わなかった。家族の中で一番学識があったので、自分に日本式の名前をつけることが任されたという。朝鮮から出たのは故郷の江亭洞という村で、移住させられたのは「満州」だったので、名前を「江満」と変えた。朝鮮と「満州」を子孫も永遠に忘れないようにと、その名前を考えた。「営口安全農村」では、朝鮮人の文化的、経済的、政治的な自由がすべて奪われてしまった。そのことが恨（ハン²³）となり、今でも解けていないという。

教員生活

LD氏によれば、海城師道学校には、朝鮮人だけの特修クラスが1学級あった。海城師道学校では、簡単な知識しか教えてもらえなかった。自分たちをエリートに育てるためではなく、「砲弾」（軍国少年一筆者注）を育てる教員にするためだと思った。自分が教員になった時は、数え歳で19歳で、まだ子どもだった。当時、徴兵の際には、何も知らない愚かな者より、少しでも学校に通った者のほうが望まれていたという。

海城師道学校に2年間通って卒業し、1945年3月に「営口安全農村」近くの月城米穀増産隊国民優級学校に赴任した。学校には教員が5人しかおらず、自分は代理校長となり、5年生を教えた。当時、教員も生徒も全員「協和会²⁴」に入ることを義務付けられ、いろいろな活動もしなければならなかったという。

当時、自分は郷軍人だったが、教員の身分は高かったので、軍事訓練には行かなかった。在郷軍人は日本式の名前が書かれた名札をつけることになっていた。名札の表は日本式の名前を書き、裏面に朝鮮式の名前を書いた。朝鮮人という民族意識を忘れなかった。今考えても、その当時によくやったと思っているという。自分だけではなく、多くの朝鮮人青年も同じようなことをやっていた。もし、そのような行為が日本人に見つかったら大変だったが、覚悟して思い切った行動をした。当時、多くの朝鮮人は反日思想を持っていたという。教員をして5ヶ月ぐらいで日本が敗戦となったので、教員生活も終わりとなった。自分の給料は本来27円だったが、戦争の末期は大変な状況になり、食料の配給はあったが、給料は1回ももらえなかったという。

赤紙が来た朝鮮人青年たちの反抗

大東亜戦争が勃発してから、兵士が戦場で玉砕した報道が多くあった。「営口安全農村」に住む多くの朝鮮人の青年たちも徴兵された。1924年以降に生まれた人たちは義務兵として徴兵され、1924年以前に生まれた人たちは志願兵として徴兵されたという。

赤紙が来た朝鮮人の青年たちの見送りをしたことがあった。多くの朝鮮人の青年たちが酒に酔った振りをし、拳で汽車の厚いガラスを打ち破って血まみれになった光景を何度も見かけた。朝鮮人の青年たちはまるで狂ったようだった。徴兵されたことに反抗したかったのだが、他に表現する方法がなく、そのような痛ましい行動でやりきれない心情を表していたのではないかという。

朝鮮人の青年たちが徴兵されてゆく光景を見て、いつか自分も徴兵されるのではないかと不安だったという。まだ若かったが、反日精神を持っていた。当時、「営口安全農村」の溝帮子の附近で「抗日連軍」が活動していることを知っていたので、「営口安全農村」に住む友人と地図を広げながら、村から逃げて「抗日連軍」に参加しようとも考えた時期もあった。徴兵から逃れるため、「営口安全農村」から逃げ出した朝鮮人青年が実際に何人もいたという。

4. 2. 考 察

筆者は、本稿で今までの先行研究で用いられていない移民一世へのライフ・ヒストリーによるミクロの視点で、移民一世の事例を通して、「安全農村」の社会的一断面を見てきた。

事例1と事例2の証言から分かったのは、「安全農村」には学校、警察署、神社、病院が設置されていた。学校では、朝鮮語の使用が禁止されたうえ、日本語の使用が強要され、生

徒たちに神社の参拝も強要されていた。そして、「安全農村」には警官が常駐していたうえ²⁵、満鉄沿線に村が配置されていたので、満鉄警備隊がいつも駆けつけることができた。その意味では、「安全」農村だといえたかもしれない。しかし、朝鮮人移民にとっては、いわゆる「安全農村」においても、漢族の農民の抵抗があったり、徴兵に狩り出されたり、先祖代々から伝わってきた名前も変えられたり、そして民族言語の使用を禁じられたりするなど、安全でも平穏でもなかった。それで、「安全農村」は、「青々と広がる稲田に孜々と働く同胞農希望に輝く新天地²⁶」ではなかったといえよう。

本稿で取り上げた二つの事例以外の移民一世の証言からも分かったのは、「安全農村」に入った当時、彼らの家族のなかに働き手がいた。事例1のXK氏が証言したように、「安全農村」に入るためには、入村誓約書が必要だった。つまり、「安全農村」に入るには、働き手が必要とするなどの制限があり、誰でも入れるものではなかったといえよう。事例2のLD氏の家族が「営口安全農村」に移住したのは、朝鮮の金融組合に借金をして、返済ができなくて仕方なく移民団に入ったのである。朝鮮総督府が金融組合に債権放棄をさせてまで「安全農村」に朝鮮人開拓団を送り込んだのは、LD氏の「朝鮮総督府が朝鮮人移民団を募集したのは関東軍に食料を提供するためではないか」という言葉が当たっていたと思われる。「満鉄」の総裁や関東軍の司令官が「安全農村」を視察にきたことから、関東軍がいかに「安全農村」の食料生産を重視していたのかを察することができよう²⁷。

また、事例1と事例2の証言から分かったのは、学校で毎日のように軍事訓練を受け、戦場に送られる覚悟をしなければならなかったということである。彼らは敗戦までほとんど「安全農村」から出ることはなかった。一部の離村者を除けば²⁸、「安全農村」から外に出て行ったのは、徴兵に狩り立てられた青年たちである。「安全農村」で暮らしていた朝鮮人移民の多くは外の社会とはほとんど接触できずにいたが、「満州国」を取り巻く大きな政治的状況の変化の影響を刻々と受けていたといえよう。

洪（1997：p.67）によれば、「朝鮮総督府が建設した安全農村あるいは集団部落、そして関東軍が建設した集団部落は形態が違ってしたが、全部植民地民衆であった在満朝鮮人を統制するために日帝（「日本帝国主義」－筆者注）が1931年9月18日以降建設した共通点を持っている」のである。これまでの多くの先行研究は、洪（1997：p.67）に共通しており、「安全農村」に着目して、「日本帝国主義」の在満朝鮮人の統制の実態を明らかにしようとした。筆者も基本的にこれまでの先行研究と同じ問題意識を持っている。違う点は、これまでの先行研究は、文献資料に基づき、マクロの視点で「安全農村」について考察してきたが、筆者は、移民一世へのライフ・ヒストリーによるミクロの視点で「安全農村」について考察したことである。

現在生存している移民一世が「安全農村」に移住した時、10歳前後で幼かったため、「安全農村」の経済的状況についてはそれほど詳しくないと思われるので、経済面については前述の先行研究を参照されたい。しかし、移民一世は「安全農村」の日々の暮らしのなかで「満州国」の政治的・社会的状況の変化を感じながら生きてきた。1940年時点で、「安全農村」に居住していた朝鮮人は8,423人で（表1参照）、「満州国」に居住していた朝鮮人は1,189,338人²⁹だった。確かに、「安全農村」で暮らした朝鮮人移民は在満朝鮮人の一部でしかない。しかし、「安全農村」で暮らし、体験したライフ・ヒストリーは、移民一世の個人史でありながら、彼らを取り巻くその時代の社会史でもあることは揺るぎない事実であろう。移民一世

のライフ・ヒストリーに焦点を当てれば、彼らが生き抜いた時代の社会史の一断面を浮かび上がらせることができるといえよう。

本研究で注目しているのは、移民一世のライフ・ヒストリーによるミクロの視点である。「安全農村」で多くの朝鮮人移民が暮らしていた。朝鮮人移民が「安全農村」の欠くべからざる存在であったといっても過言ではないであろう。しかし、彼らに着目した先行研究がまだ見あたらない。これまでの先行研究においては、文献資料に基づいて農地問題、金融状況などが論考されてきているが、文献資料だけでは、朝鮮人移民自身が「安全農村」をどのようにとらえていたのかは見えてこない。それでは、事例2のLD氏がいう恨（ハン）の世界を読み取れないであろう。

LD氏によれば、「安全農村」の朝鮮人の青年たちは、民族の名前を変えられて、危険を冒してまでも名札の裏に民族の名前を書き、「日本帝国主義」の支配に反抗意識を持っていた。LD氏は「安全農村」の付属学校の推薦を受けて師道学校に進み、当時の朝鮮人としては、エリートコースを歩んでいた。統治者側は、LD氏に「日本帝国」への忠誠を望んでいたであろう。それで、師道学校を卒業したあと、数え歳19歳の若さで軍国少年を育てる代理校長の「大任」まで任されたと考えられる。しかし、LD氏は友人と一緒に「安全農村」から逃げ出して「抗日連軍」に参加しようとした。また、事例1のXK氏の証言から分かったのは、「安全農村」を開拓した時、もともと村に住んでいた漢族の農民を追い出したので、漢族の農民の抵抗があった。この二つの事例をつき合わせてみていえるのは、朝鮮総督府は「安全農村」を建設したが、中国の民衆の抵抗があったばかりでなく、朝鮮の民衆の人心も得られなかったということである。

本稿における2人の移民一世の当時の日常生活についての重層的な語りから、「安全農村」は建設された当初から瓦解の宿命を帯びていたといえよう。風間の言を借りれば、「『満州国』の農村行政支配は、関東軍の武力支配と警察権力の民衆支配がなければ、1945年8月をまたずして瓦解していたといえる（1986：p.326）」のである。

5. 終わりに

いま「安全農村」について知っているのは、「安全農村」で暮らした移民一世を除けば、一部の研究者しかいないであろう³⁰。客観的にいえば、本研究は少し時期的におくれた研究だと認めざるをえない³¹。しかし、「安全農村」に関する移民一世のライフ・ヒストリーによるミクロの視点を用いた先行研究が見あたらないので、新しい視点で「安全農村」について研究することを敢えてした。

これまでインタビュー調査に応じてくれた移民一世たちは、朝鮮民族の移民の歴史を記録に残しておくことは大事であると理解を示し、ほぼ全員がインタビュー調査に積極的に協力してくれた。移民一世はほとんどが80歳前後になっている。今までインタビュー調査をした移民一世のうち4人がすでに亡くなった。事例2のLD氏は筆者に、「君が関心をもって移民の歴史を聞いてくれなかったら、私は誰にも話せないまま死んでしまうかもしれない」といった。以上のことから、移民一世へのインタビュー調査を急がなければならないと痛感している。

今後の課題としては、四つあると考えている。第一に、事例1のXK氏の証言のように、「安

全農村」に入村した者の中には、ソ連から逃れてきた朝鮮人もいた。これまでの先行研究では、「安全農村」の入村者は、「満州」地域の朝鮮人難民および朝鮮半島からの移民としか記述されていない。「安全農村」にソ連からきた朝鮮人も収容したことから、「安全農村」の実態がよりいっそう複雑であったことが考えられる。今後はもっと広い視野で、「安全農村」について研究することが望ましい。第二に、文献資料によるマクロの視点と移民一世のライフ・ヒストリーによるミクロの視点を有機的に結合させ、「安全農村」の社会的および経済的状況をさらに深く解明することである。第三に、朝鮮人「満州」移民は「日本帝国臣民」として「満州」に移住させられたので、日本人「満州」移民と関連させて朝鮮人「満州」移民の研究を進めることである。第四に、日本の敗戦後、「安全農村」のほとんどが朝鮮族郷（鎮）となり、そこでまだ多くの朝鮮族が暮らしている。「安全農村」の研究を通して、中国朝鮮族の研究を深化していくことである。

[注]

- 1 満州は中国東北一帯の通称であったが、現在の中国では一般に「東北」あるいは「東北三省」という。中国では、研究書、論文の中でも満州には必ず引用記号をつけ「満州」と表記する。本稿では、「満州」と「満州国」という表記をそのまま使っているが、そこに正当性を与えようという意図も傀儡性を強調しようという意図もない。
- 2 金静美（1992）『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』現代企画室、p.315。
- 3 金周溶（2004）「満洲地域韓人『安全農村』研究—營口、三源浦地域を中心として」韓国独立運動史研究所、p.114。
- 4 洪鐘億（1997）「日帝の在満朝鮮人を統制するための鉄嶺安全農村について」『明知史論』第9号、pp.65－66。
- 5 樋口雄一（2000）『戦時下朝鮮人労働動員基礎資料集』第2巻、緑蔭書房、pp.71－73。
- 6 鎌田澤一郎（1935）『朝鮮人移民問題の重大性』朝鮮総督府、p.61。
- 7 「ライフ・ヒストリー（生活史）」とは、個人の一生の記録、あるいは、個人の生活の過去から現在にいたる記録のことである（谷、1996：p.4）。
- 8 鉄嶺県腰堡鎮は朝鮮族鎮ではないが、まだ多くの朝鮮族がそこで暮らしている。
- 9 調査対象者の了承を得たうえで、ICレコーダーでインタビューした内容を録音した。
- 10 「自由移民」とも呼ぶ。1939年以降、一般的に「分散移民」と呼ぶ。
- 11 1936年に「集団移民」で「綏化安全農村」に入ったHB氏とGP氏からも同じ証言を得た。1936年3月に綏化第二農村に入った時、村から追い出された漢族の農民が井戸に馬糞を入れたので、暫らくの間、雪を溶かして飲んだという。
- 12 1937年8月21日、全連邦共産党中央委員会とソ連人民委員会議は、スターリンとモロトフの署名のもとに、極東地方の国境地域から朝鮮人を移住させる決定を下した（アナトーリー・T・クージン、1998：p.135）。
- 13 収容家族の選定要件として、①思想堅実にして、勤勉なるもの。②家族中労働し得る者、2人以上あるもの。③転住して農業を営め得ざるもの（朝鮮総督府、1938：pp.109－110）。
- 14 2008年8月14日に鄭吉泳氏と面談した際、入村誓約書の転出に了承を得た。
- 15 綏化駅東方1.5キロメートルの「綏化自警村」には、1935年3月末に10戸、19人が入植し、そのうちの1戸が17.6町歩、他の9戸が6.2町歩の耕作をおこなった（金、1992：p.466）。
- 16 2008年8月22日に、LD氏の甥であるLY氏にもインタビュー調査を行った。
- 17 「營口安全農村」で生産された米は、軍用にもまわされた。1937年度には、もみ45,000石が軍用米として「納入」された（金、1992：p.328）。
- 18 現在瀋陽市に在住しているLK氏からも同じような証言を得た。LK氏は1934年～1936年の2年間、「營口安全農村」で暮らした。白を没収されてしまったので、稲を瓶に入れて棒で搗いて食べたという。
- 19 「營口安全農村」の農民は、収穫後の副業も会社側（東亜勸業、のちに「満鮮」拓殖株式会社）に強制され管理されていた。会社側は、各戸に責任生産枚数を一方的に割当て、予定枚数を生産しない農家は、農家経済に余裕あるものと見なされて翌春の農耕資金の貸出が停止された。1937年度の生産目標は50万枚

- であったというから、この年には各農家は一戸当たり 300 枚以上の生産を強制されていた（金，1992：pp. 328－329）。
- 20 「満鉄」総裁だった松岡洋右，関東軍司令官だった植田謙吉，関東軍参謀長だった東条英機が前後して「営口安全農村」を視察した（孫，2003：口絵写真）。
- 21 インタビューは朝鮮語で行ったが，この表現はLD氏が流暢な日本語で話した。
- 22 日本が植民地支配のため皇民化政策の一環として，朝鮮人から固有の姓を奪い日本式の名前に変えさせ，天皇家を宗家とする家父長制に組み入れようとした政策，1939 年 11 月朝鮮民事令改正という形で創氏改名が公布され，翌年 2 月から施行された（伊藤他，2000：pp. 248－249）。
- 23 恨（ハン）は朝鮮語で，発散できず，中にこもってしこりをなす情緒の状態をさす。怨恨，痛恨，悔恨などの意味も含まれるが，日常的な言葉としては悲哀とも重なる（伊藤他，2000：p. 355）。
- 24 1932 年 7 月に発足した。1938 年に協和青年団と同少年団を創設し，強力なイデオロギー教育を行なった（植民地文化学会・中国東北淪陥 14 年史総編室編著，2008：pp. 217－218）。
- 25 「鉄嶺安全農村」には日本領事館から派遣された警官 2 名が常駐したうえ，緊急の場合には，領事館警察の応援を受けた。「河東安全農村」には 40 名以上の警官が常駐していた。「営口安全農村」には 1933 年から 30 名の警官が派遣され，毎月 1 回交代していた。「綏化安全農村」の警備はハルビン総領事館が管轄していたが，たまに「満洲国」から派遣された警官も警備を担当していた。「三源浦安全農村」には，警官が 200 名以上常駐していた（孫，2003：pp. 85－91）。
- 26 1935 年 7 月 3 日分の『京城日報』の連載記事。
- 27 「満鉄」総裁だった松岡洋右，関東軍司令官だった植田謙吉，関東軍参謀長だった東条英機が前後して「営口安全農村」を視察した（孫，2003：口絵写真）。
- 28 現在瀋陽市に在住している LK 氏は，1934 年に「自由移民」で「営口安全農村」に移住した。農業をしても，米が全部徴収されてしまうので，1936 年に家族と一緒に「営口安全農村」から逃げ出したという。
- 29 満洲国通信社（1941＝1992）『満洲開拓年鑑』（満洲移民関係資料集成 第 32 巻 復刻版），不二出版，p. 277。
- 30 2008 年 8 月 12 日から 8 月 28 日をかけて，五カ所の「安全農村」を訪ねてフィールドワークを行った。河東農村と綏化農村はかつて訪ねたことがあったので，すんなり辿りついたが，後の三つの「安全農村」に辿りつくのに，ずいぶん手間取った。たくさんの通行人に聞いても，かつてその地域が「安全農村」だったのを知っている人はほとんどいなかった。「安全農村」に関する記憶が継承されず風化していることが分かった。
- 31 筆者は五カ所の「安全農村」に入ってフィールドワークを行っていた際，多くの移民一世は「どうしてもっと早く来なかったの？」，「自分たちの親の世代だったらもっと詳しいのに」と残念がっていた。

【参考文献】

- アナトリー・T・クージン著，岡奈津子・田中水絵訳（1998）『沿海州・サハリン近い昔の話－翻弄された朝鮮人の歴史』凱風社
- 伊藤亜人・大村益夫・梶村秀樹・武田幸男・高崎宗司監修（2000）『朝鮮を知る事典』（新訂増補）平凡社
- 伊藤一彦「在満朝鮮人問題」（1991）『東京女子大学比較文化研究所紀要』52 号，pp. 65－83。
- 「間島集團部落建設概況」朝鮮総督府（1938）『調査月報』第 6 巻第 3 号，pp. 105－120。
- 梶村秀樹（1993）「1930 年代満洲における抗日闘争に対する日本帝国主義の諸策動－『在満朝鮮人問題』と関連して」『梶村秀樹著作集』第 4 巻，明石書店
- 鎌田澤一郎（1935）『朝鮮人移民問題の重大性』朝鮮総督府
- 金静美（1992）『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』現代企画室
- 金周溶（2004）「満洲地域韓人『安全農村』研究－営口，三源浦地域を中心として」（朝鮮語）韓国独立運動史研究所，pp. 108－134。
- 金永浩（2007）「在満朝鮮人の生活実態と『安全農村』」京都大学大学院人間環境学研究所『人間・環境学』第 16 巻，pp. 43－58。
- 植民地文化学会・中国東北淪陥 14 年史総編室編著（2008）『＜日中共同研究＞「満洲国」とはなんだったのか』小学館

- 孫春日（2003）『「満洲国」時期朝鮮人開拓移民研究』（中国語）延辺大学出版社
- 東亜勸業株式会社編（1935）『河東，營口，鉄嶺，綏化，三源浦安全農村建設の経過並に現状』
- 谷富夫（1996）『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社
- 鄭吉泳（1997）『興和五十年 1934～1984』（私家版）
- 樋口雄一（2000）『戦時下朝鮮人労働動員基礎資料集』第2巻，緑蔭書房
- 玄恩柱（2003）「農業生産を通してみる安全農村住民の経済状況」（朝鮮語）南陽洪鐘佖博士定年退任記念
論叢発行委員会編『東北亜歴史の諸問題』白山出版社
- 洪鐘佖（1997）「日帝の在満朝鮮人を統制するための鉄嶺安全農村について」（朝鮮語）『明知史論』第9号，
pp.62－108．
- ボール・トンプソン著，酒井順子訳（2002）『記憶から歴史へーオーラル・ヒストリーの世界』青木書店
- 満州国通信社（1941＝1992）『満州開拓年鑑』（満州移民関係資料集成 第32巻 復刻版），不二出版
- 依田憇家（1976）「満州における朝鮮人移民」満州移民史研究会編『日本帝国主義下の満州移民』龍溪書舎

【参考した新聞記事】

「南満の同胞安全農村を訪ねて」『京城日報』，1935年7月2日～1935年7月30日．